「日々の理科」（第659号） 2016（H28),-4,26

「カラスノエンドウの教材性（２）」

お茶の水女子大学附属小学校　田中　千尋

カラスノエンドウ（ヤハズエンドウ）の花が、しぼんでから結実するまでの様子を、スキャナーを使って撮影してみた。

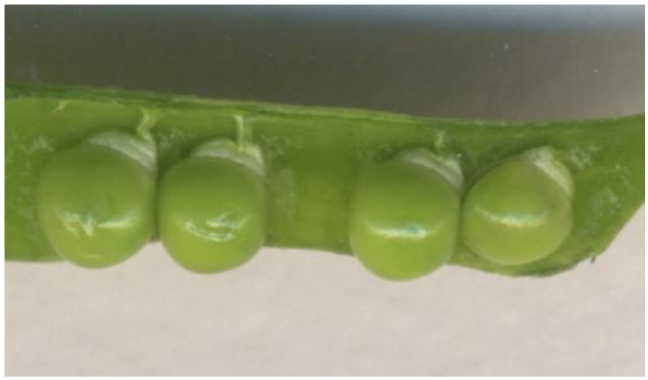
花の一つ。二つの翅を開いたような形状が、蝶のように見えるので、「蝶型花」と呼ばれる。これは、マメ科の植物の特徴で、フジ、クズ、ニセアカシア、ベニハナインゲン、シロツメクサ（クローバー）など、ほとんどのマメ科の植物の花は、この形である。

花弁がしぼむと、早くも果実（豆の鞘）が姿を現す。鞘の中には、すでに種子の列も見える。

その翌日にはこのように、種子の凹凸がはっきりしてくる。成長速度が非常に速い。

慎重に鞘を切開してみると、きれいに「種子の卵」が並んでいる。まるでスズランの花のようである。

拡大してみると、種子の一つひとつが、鞘の上部（維管束）と連勝されている。ここから養分や水分が補給されている様子がわかる。植物染色液を使ったら、面白い実験ができる可能性がある。



やや熟した種子。一粒の大きさは５㎜ほどだ。このあと、茶色くなって、表面の水分を失う。外部の刺激で鞘がパチンと跳ねて、種子を周囲に飛び散らせる。

ここに載せた写真は、すべて１本のツルから採取したものである。３年生だと「豆集め」に夢中になってしまうが、５年生学習では、役立ちそうな学習材である。２学期を待たずに、近く授業で使ってみたい。